

向陽介護便り

平成20年4月 第25号

発行人:(有)向陽介護システムズ
新宿区東五軒町1-12 青木ビル

TEL 03-3267-2015

幸せな仕事

先日,ある講演会で、長野県の諏訪で地域と一体になった医療や患者さんと家族の心のケアまでも含めた医療に長年携わる傍ら、チェルノブイリやイラクの子供たちへの医療支援活動を続けている「鎌田 實」氏の話聴き、大変感動しました。(演題は「ターミナルケアについて」)

又、同氏は、昭和23年の東京生まれ。医学部を卒業後、諏訪に出向き、33年もの間ターミナルケアに取り組む中で、医療・看護・介護に当たる者への助言を書き纏められています。これら助言は介護に携わる者にとり、参考になるものが多く、今回はその一部を紹介させていただきました。

はじめに(まえがき)・・・辛い仕事を幸せな仕事に変える100のヒント

看護や介護は地獄だ、という言葉を見ました。

新規採用者の1割が離職するといいます。

何万人もの看護者が燃え尽きつつると聞きました。

多くの医師が疲れています。

介護の時代だといわれる割には、介護のプロに対するこの国の評価は低くて悲しくなります。

何かがおかしい。幸せな仕事のはずなのに。

目の前にいる病気や障害と闘っている人たちに、最高の医療や看護や介護を届けてあげたい。

優れた、安心感のある医療。

確かで、優しい看護。

生活を重視した、あったかな介護。

そんな仕事がしてみたい。

(後略)

頑張らない介護

介護は柔軟なほうがいいと、私は思います。日本人は自分の健康を犠牲にしてまで、一生懸命介護する傾向があります。頑張りすぎて、身もころも疲れ果ててしまい、すべてを投げ出してしまふ結果になってはいけません。介護は放り出さないことが大切です。

疲れを癒す方法は、自分の好きなことかまわないのですが、できることなら、心と体の両方を癒すことのできるものだといいですね。スポーツや温泉など、たとえ短時間でも介護のことを忘れて没頭できるものをお勧めします。(中略)

老いや障害を支え、その人を看取るということは、その人の命を次への世代へとつなぐ「命のリレー」だと、私は思っています。細い糸でもいい、最後までつながっていてこそ、何か大切なものを得ることができるのではないのでしょうか。そのためにも、介護者の疲れしているサインを見逃してはいけません。頑張りすぎてはいけません。介護者がまとっている元気で幸せな空気は、介護されている人をもやさしく包むはず。疲れを感じた時は我慢をせず、自分を休ませ、再び介護に臨む人を、私は見事だと思います。

(「鎌田 實」著 『幸せな仕事 命を支える人たちへ』より)